



1月22日、尋問終了後の記者会見に臨む梅本美有さん。

私の人生、返してほしい

福岡県 梅本美有さん(26歳)

願いは健康な体に戻り、ただ普通に暮らすことだ。

梅本美有さんは中学3年生から高校1年生にかけてHPVワクチンを3回接種した。接種後、全身の痛みや吐き気、倦怠感などに襲われた。

全身の血が鉛のように重く感じられ、朝、目は覚めても体が動かない。風呂に入ると、毎日のように鼻血が出た。

高校への通学が難しくなり、3年生の4月に単位制の高校へ転学せざるを得なかった。それまで通っていた高校の、かばんや制服を泣きながらごみ袋に詰

めて捨てた。保育士になる願いはかなわなかった。単位制高校を卒業し、自宅療養を経て、大学に進学。

卒業後、障害者枠で市役所に採用されたが、体調が悪く辞めなければならなかった。激しい痛みが長い間続く。痛みを感じなかった日々がどんなものなのか思い出すことができない。

「毎日毎日、痛くて苦しくて血を吐くような思いでこの10年を過ごしてきた。この体であと10年、20年も生きるといのは死ぬと言われるより残酷です。私の人生を返してください」

HPVワクチンをめぐっては、全国4地裁で2016年から集団訴訟が続いている。最近、原告本人尋問で証言した4人を紹介する。

の勧奨再開に反対した

十二分に苦しんだ

千葉県 園田絵里菜さん(27歳)



2月21日、尋問終了後の記者会見に臨む園田絵里菜さん(左)。

園田絵里菜さんはこの10年間を「地獄のような、むなししい日々」と振り返る。

東京地裁では酸素ボンベを携え、カニユーレを装着して酸素吸入をしながら証言した。

中高一貫校の中学3年生の時、HPVワクチンを3回接種して高校に進んだ。接種後、入院が必要なほどの激しい生理痛などの症状に襲われた。通学中に失神した。握力が弱まり、ペットボトルのふたを開けることができず、ほぼ寝たきりの状態になった。食事も、歯磨きも、入浴も母の介助が必要になっ

た。自力で首を支えることも難しく、何とか座位が保てるように回復するまで10年かかった。

高校では特進クラスに在籍していたが、3年生の時、ほとんど授業に出ることができなくなり、通信制の高校に転学した。現在は大学の通信部で学ぶ。体調が悪く卒業できるのか、見通しは厳しい。「両親ともに還暦を迎えた。親がいなくなったら、どうやって生きていけばいいのか、不安で医療的ケアのある障害者施設を探している。十二分に苦しんでいる。人権や人としての尊厳を返してほしい」。



2月26日、尋問終了後の報告集会で話す落合晴香さん。

なくした記憶、 取り戻したい

三重県 落合晴香さん (26歳)

笑顔の奥には、深い苦しさと悲しみがある。

落合晴香さんは中学3年生の時、HPVワクチンを3回接種

した。翌年、高等専門学校に進んだ。足がむくみ、膝が痛んだ。その後、全身の痛みや記憶障害などの症状に次々と襲われた。今も頭痛や重い生理痛、倦怠感や耳鳴りなどに苦しむ。

高専の4年生で19歳だった2017年の1月に、学校で意識を失った。目が覚めたら、自分がどこにいるのかわからず、自身の名前も住所も、生年月日も、両親の名前も思い出せなかった。入院し、高次脳機能障害

の検査などを受けた。19年間の記憶の大部分を失っていることがわかった。

その年の4月にも家で意識をなくし、救急搬送された。救急隊の到着前に呼吸が止まりそうになった。家族が心臓マッサージをしたことで、一命を取り留めた。高専は、休学せざるを得なかった。

卒業までに7年かかった。意識を失い、呼吸が停止し、記憶がなくなるのではないか。その恐怖に絶えず直面している。「今も、なくした記憶を取り戻したいと思う。悔しい」

— 集団訴訟の原告たち —

私たちはHPVワクチン

生きているのが 精いっぱいすぎて

兵庫県 大阪原告10番さん (匿名、20歳代)

「私の人生を一言で表現すれば、『諦め』です」という。

中学1年生の時にHPVワクチンを3回接種した。接種後、頭の周囲が締め付けられるように痛んだ。うずくまって動けなくなるほどの腹痛や、睡眠障害に苦しんだ。倦怠感で朝、ベッドから起き上がることができず、登校が難しくなる。父からは「仮病だ」と責められた。かかりつけ医から心身症と診断され、中学3年生の時、子どもの睡眠障害を治療することができず、半年間入院した。

症状は改善せずに悪化した。家庭環境や学校に問題があると

決めつける、医療スタッフの言葉に傷ついた。退院して高校に進んだが、進級することが難しく、通信制の高校に転校した。5年かかって卒業し、今は通信制の大学で学ぶ。

痛みの発作で「痛い痛い痛い」「助けて！死ぬ」と叫びながら、意識を失うこともあった。「体調が悪くて、生きているのが精いっぱいすぎて何も楽しいと思えない。しんどい日ばかりで、生きていても仕方がない」と思えないのです」

クレジットのない写真／筆者
たかなみ あつし・フリージャーナリスト。



3月7日、尋問終了後の記者会見にて。